闘病20年間中の採集

昭和50年3月，脳血栓で倒れ，重症で入院治療。7月，特殊な手術の結果，恢復。植物名なども思い出せるまでになる。しかし，左手足不随，言語大体回復，杖を右手に左足をひきずりながら歩くまでになる。気力も出てきて翌年から採集行へ。足は車で，採集はカメラでする。お子さん方が多く，日曜や休日に命ぜられる各地へ案内，遠く北海道や九州まで。春秋2回の堀会に大阪各地へ私と車で出席，会員の発表を熱心に聴く。丹波自然友の会の年1，2度ある一泊バスツアーには奥様同伴で参加(東は美ケ原や五箇山，西は大山・帝釈峡その他各地)，奥さんと宿舎近傍をマイペースでゆっくり観察，カメラで撮るのであった。これを多くの方々に助けられつつ，20年間続けた。

逝去（平成7年）後，十数冊の大学ノートに，すべての文通の下書きが書かれ，またテレビ・新聞・雑誌などをみての感想や記録が残されていて，頭が下がるのであった。　（まつやま　かくろう）

先達が残した墨跡

樋口　清一

兵庫県生物学会（昭和22年結成）の草創期，さらにその前身，兵庫県博物学会（昭和5年～昭和16年）に活躍した人達やその指導者の書が私の父（平成7年4月死去）の残したものの中にある。中には無理に頼んで書いてもらったものもあるらしく，生前「この方はこれしか書いていない」とも言っていた。

この人達は共通して筆達者であり，各々が「信念」を持っておられたことがうかがえ学ぶことが多い。そのころの写真を見ると採集会はネクタイ・背広姿であるのもこの辺りと関係があるのか興味深い。

牧野富太郎氏

著名な植物分類学者，大正から戦前まで再三来県し，県下各地の採集会で指導している。

（写真4枚　No.1，No.3，No.4，No.5）

「淵を臨んで魚の美を羨むより退いて網を結ぶ」

氏は号を「結網」と称し，書には「牧野結網」と署名している。「結網」とはこの漢書の語句よりとったもので，美しいと眺めているより行動を起こすべきと教えている。

「喜寿　薬もて補ふことをつゆだにも吾れは思わず今日の健やか　理学博士　牧野結網」

「朝夕に草木を吾の友とせは　こころ淋しき折りふしもなし　牧野結網」

「氷の山から谷底見ればお萬居らない田がつづく　牧野結網」（寄せ書き）

※お萬＝おまえ（お前）の高知地方の方言。

小泉源一氏

京都大学植物学教室初代教授，日本植物地理学会創設者，昭和初期県下の採集会で指導し，関西の植物分類を確立した。

（写真1枚　No.6）

「日本群島ニ於ケル最古植物化石……」

森　為三氏

兵庫県生物学会初代会長（15年間会長），兵庫農科大学（現神戸大学農学部）副学長，武庫川女子大教授，兵庫県文化賞受賞。

（写真1枚　No.2）

「魚けもの　しらべ暮らして五十年」

氏はこれを書きながら「揮毫はこれが最初で最後じゃ」と言われたとか。森先生の筆なるものは他にないかもしれない。

山鳥吉五郎氏

兵庫県博物学会顧問，兵庫県中等学校（旧制）教育植物学会長，師範学校教授を経て西宮市立高等女学校長，兵庫県生物教育界の恩人で兵庫県の植物分類の草分け。

（写真2枚　No.7，No.5）

「石南を見に行く朝の霧はるる　北斗」

「伽羅木に風の冷たし秋立つる　北斗」（寄せ書き）

阿部良平氏

兵庫県博物学会長（昭和5年結成から，昭和16年戦争により会が中断するまで務める），姫路中学校（現姫路西高）で教鞭を執る。評論家・作家阿部知二氏の厳父，兵庫県の植物分類の草分け。

（写真1枚　No.5）

「連れはあとから籠で来る　骸骨」（寄せ書き）

大浦茂樹氏

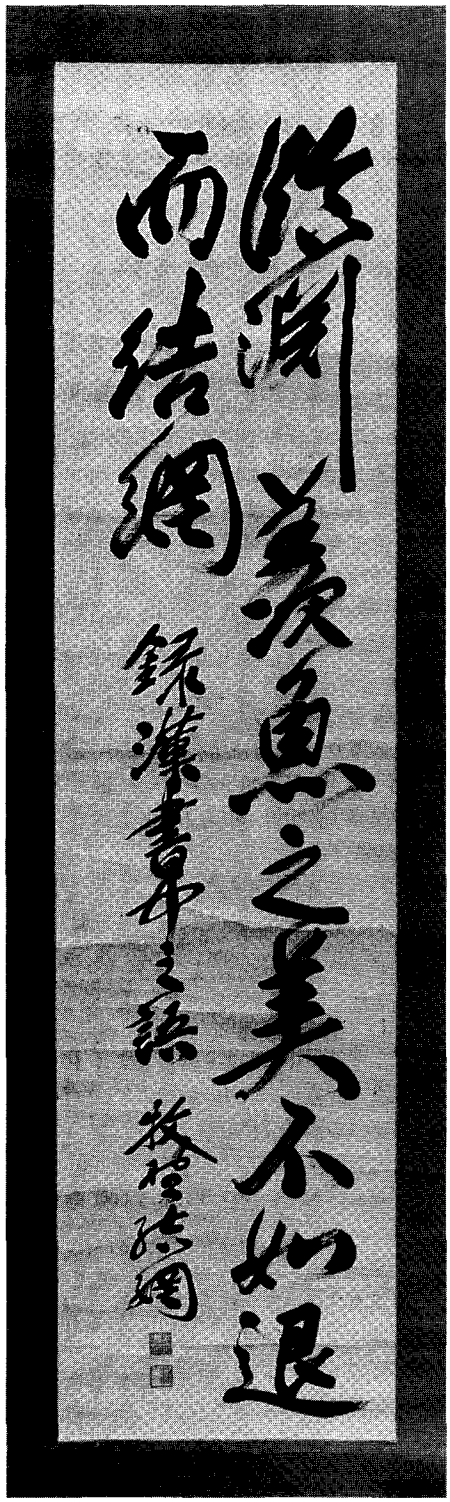
兵庫県博物学会幹事，神戸市立諏訪山小学校長，兵庫県理科教育の指導者。視学委員。

（写真2枚　No.8，No.5）

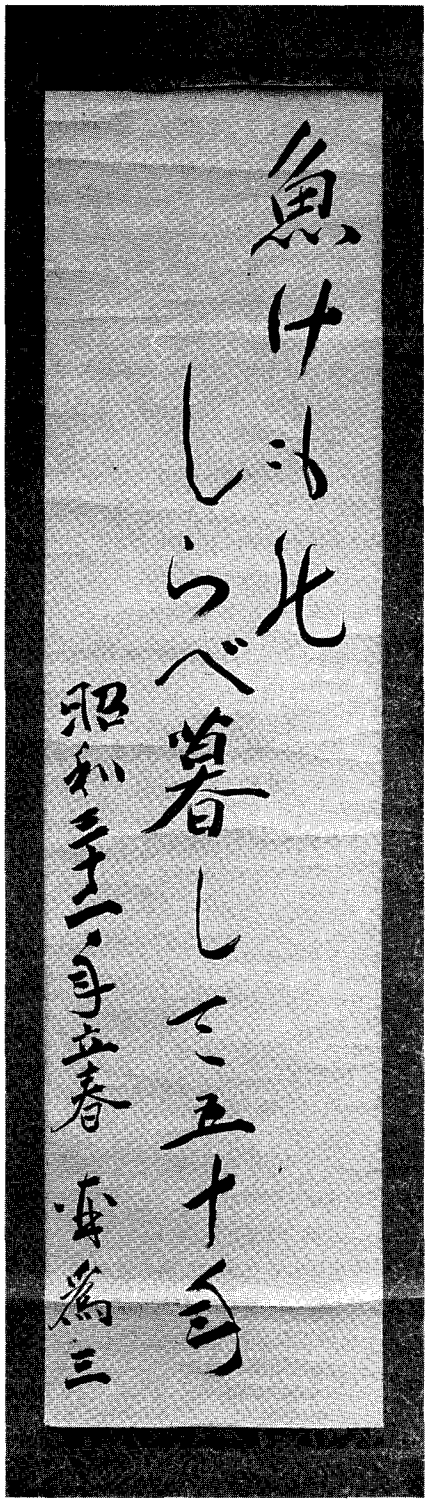
「勲香到　茂樹」

「観る　為す　考へる　茂樹」（寄せ書き）

このほかに署名だけのもの，作者不明のものが若干ある。　（ひぐち　きよかず：丹有支部長）



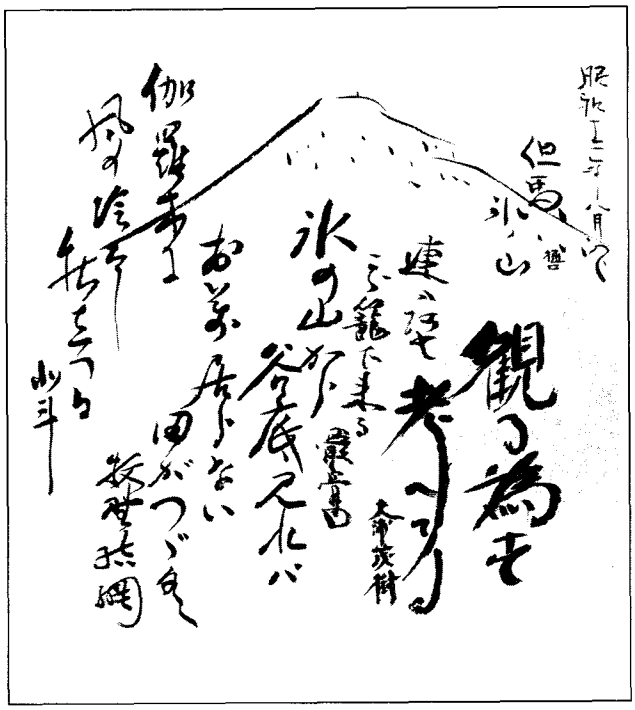
No. 1　牧野富太郎先生の書（軸装）



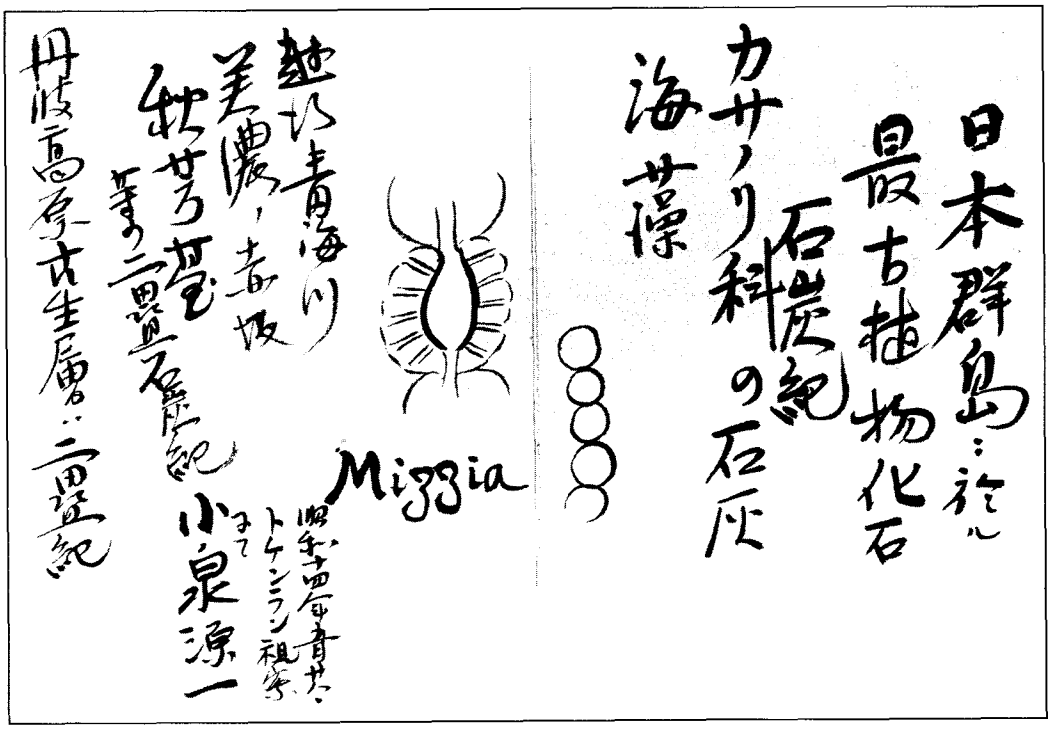
No. 2　森為三先生の書（軸装）

No. 3　牧野富太郎先生の書（額装）

No. 4　牧野富太郎先生の書

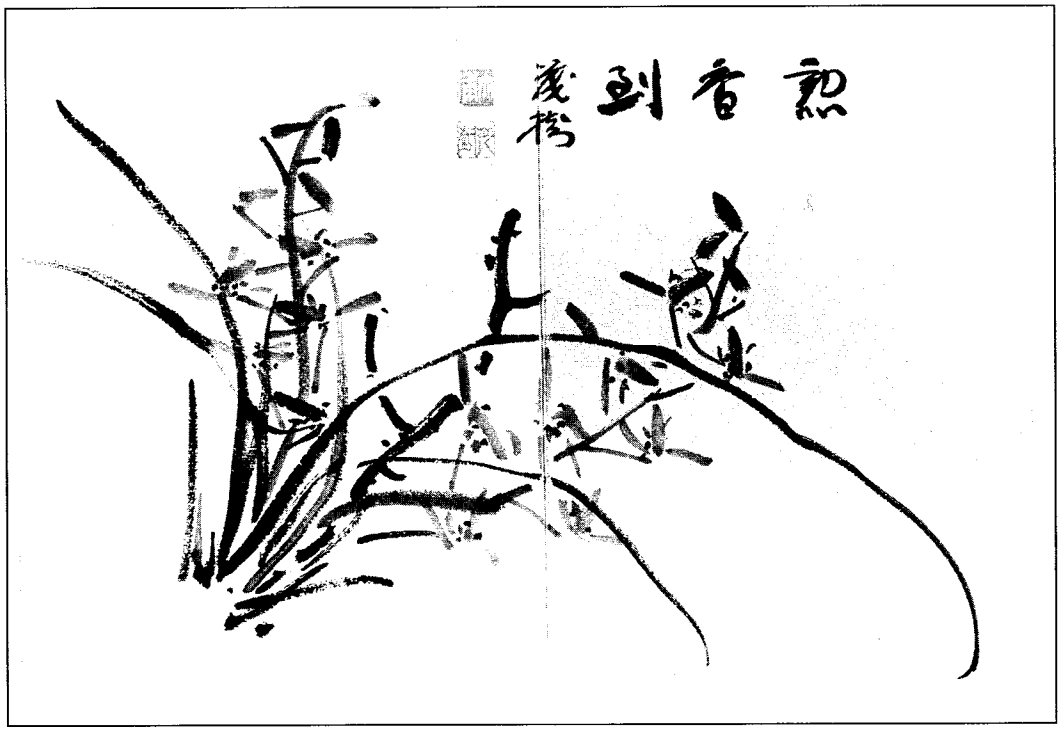


No. 5　寄せ書き


日本群島に於ける
最古植物化石
石炭紀
カサノリ科の石灰
海藻
越後青海川
美濃、赤坂
牡蠣
二畳紀
丹波高原古生層：二畳紀
Mizzia
小泉源一

No. 6

No. 7



No. 8